

国語

➡ 中・高学年 | 「読むことの学習」

「独りで読み進める力」を育てる 国語学習

1. はじめに

子どもたちの「独りで読み進める力」を育てたいと思う。それは、これまでの自身の実践を振り返った時に、「自分の読みを子どもたちになぞらせようとする学習を仕組んできたのではないか。それによって、子どもたちに生きてはたらく力がついたのだろうか。」という思いがあったためである。

2. 読んで気づいたことをもとに学習を進める

学習を進めるにあたり、教師だけが学習の問題を知っていて、それを順番に提示しながら学習が進んでいくということはないだろうか。それでは、子どもたちはこの学習がどの方向に向かっていて、何のために与えられた課題について考えているのか、よくわからない。まず、自分が文章を読んで何を感じたのか、どこに注目したのか、それをもとに学習を進めていきたい。

例えば、「白いぼうし」(あまんきみこ著・光村図書4年上)の学習では、「読んでどのような感じがしたのか話し合おう。」と促した。すると、「さわやか」「ふしぎ」「やさしい」などの意見が出された。そこで、「では、どうしてみんなはそのように感じたのでしょうか。みんなにそう感じさせた場面や文章を見つけていきましょう。」というのがひとつの学習課題となった。

その他に、多くの子どもたちが目を向けたのは、「女の子はどこに消えてしまったのか」「『よかったね。よかったよ。』の声は誰の声なのか」であった。もちろん、これについて考えることも学習の課題となった。いずれも、多くの教室で話題になっている課題であろう。ただ、それが教師から「このことについて考えましょう。」と突然に提示されるのではなく、子どもたち

の気づいたこととつながっていることに意味があると考ええる。

3. 子どもの力を信じて継続した取り組みを

「子どもたちの気づきをもとに、と言うが、教師の思いと違っていたらどうするのか」という疑問ももたれるだろう。しかし、優れた文章は誰が読んでも同じようなところに目が向くように書かれているものである。

教師が教材研究によって「ここに目を向けてほしい」と思うところには、子どもたちも気づいていく。どうしても子どもたちが気づかないところを課題にしたいのなら、それは教師からの「提案」として出せばよい。

初めから学級全員が学習課題としてふさわしいものに目を向けるわけではないが、繰り返し学習を行っていくと、どのようなところに目を向ければよいのかもわかってくる。それゆえに継続していくことが大切である。

4. おわりに

この「白いぼうし」の学習では、他にも「どうしてこの物語は夏みかんのにおいて始まって、夏みかんのにおいて終わるのだろうか」という課題が子どもたちの中から出された。これはファンタジーであるこの作品の文章構造に触れる気づきであった。物語の学習において「文章構造」について読み深めることにはそれぞれ考えがあると思うが、そこに目を向けたことを評価したい。

教師の読みをなぞらせるだけの学習では、このような気づきは生まれまいだろう。「独りで読み進める力」をこれからも育てていきたい。